

乳 がん 検 診 （ 巡 回 ）

動 向

協会の乳がん集団検診は、昭和52年厚木市、53年からは神奈川県、55年より横浜市から受託し検診が行われてきた。いずれも視触診による検診である。昭和62年、乳がん検診が老人保健法に組み入れられ実施主体は全て市町村に移行した。

国は、平成12年に乳房エックス撮影（マンモグラフィ）併用検診を指針に盛り込み、協会でも15年より検診車によるマンモグラフィ併用検診を開始した。

国の指針では視触診とマンモグラフィを併用で40歳代は2方向撮影、50歳以上は1方向撮影を2年に1回の受診間隔で実施することとしているが、神奈川県内の集団検診では、30歳代の視触診単独検診や40歳代に1方向撮影をしている市町村もあり、指針に基づく検診・死亡率減少効果が認められる検診の実施が強く求められる。

また、21年度より実施された「がん検診推進事業」の無料クーポン検診は4年目を迎え、24年度はマンモグラフィ併用検診のうち27.4%を占めた。初再診別では、マンモグラフィ併用検診全体では初診13.4%、再診86.6%に対して、クーポン利用は初診23.0%と高率で初診者の拡大に有効であり、今後の経年受診に結びつけるよう受診勧奨することが重要である。検診の実務および精度管理は、当協会が事務局を担当している「神奈川県乳がん集団検診協力医療機関連絡会」の指導により遂行されている。マンモグラフィ検診については、連絡会内に「マンモグラフィ運営委員会」を組織し、撮影および読影の精度の維持・向上のため協議の場として症例検討会を実施している。

方 法

当協会では県域の大都市以外の自治体または大都市でも検診体制の及び難い地域には、要請があればマンモグラフィ1機（アナログ）搭載1台・CR1機搭載1台、更にデジタル・マンモグラフィ2機搭載の1台の計3台で巡回し、その地域の基幹病院や医師会の協力を得て視触診とMMGの読影を行っている。読影機関は増加したが、視触診医の確保が難しく、中央診療所からも時々、医師を派遣せざるを得ないので苦労しているのが現状である。視触診医でもなるべくMMG読影資格をもっている医師がこれからは望ましく、各施設にかなり居られる筈で、

将来検診の場で読影するような日が来ると思われるので準備されたい。

結 果

検診受診者は21年度的大幅増加より21～24年度は少しづつ減少傾向が続いている。初診・再診ともに減少しているのは、まだ乳がん検診が早期発見により死亡率の減少とクオリティ・オブ・ライフに極めて有効との認識が少なく、進んで受診するまでに至っていない感があり、要精検者の精検受診率の低下（76.6%）傾向に表われている。また県域の乳がん専門施設の少ないことも影響しているかも知れない。

要精検率は10%前後だが視触診受診者4%、マンモグラフィ併用検診（以下MMG検診）の11.3%と大部差があり、受診者の年齢層の差でもあるが、がん発見率の差が8.3倍もあり、もはや視触診単独検診を中止すべきと言える。まだ視触診単独検診続行自治体に中止を当検診協議会より申し入れた。

発見乳がん48人発見率0.21%と減少、陽性的中率は2.9%とあまり変わらないが、MMG検診受診者は発見率は10倍、陽性的中率は3倍近く高い。しかし横浜市のMMG検診に比して発見率、陽性的中率ともかなり低く、要精査率は高めである。以前より行ってきた精度管理の勉強会（症例検討会）も参加者や討議も盛んになってきたが、同じ施設よりの参加が多く全体的の精度の向上はまだ顕著ではない。

住民や受診者の意識の向上には検診従事者側の意識向上も必要と思われる。

年齢階級別では受診者は60歳～64歳台が18%と最も多く、次いで今回は40歳～44歳台16%、65歳70歳以上が相変わらず多い。最も多く受診が期待される45歳～59歳台があまり多くない。がん発見率と陽性的中率は70歳以上が13例0.34%4.2%、40歳台8例0.23%、2.4%60～64歳台4例0.10%、1.2%で50歳を中心とした年台3～5例0.2%、1.4～1.9%でまだ低い。40歳台以下は超音波併用検診（以下US検診）の導入が待たれる。J-STARTの結果がそろそろ出ると思われるので、US検診に対する準備を怠らないようにしたい。

関係の集計表は104頁に掲載